001　健

	作品名	出版社	著者	コメント	評価
1	三谷幸喜のありふれた生活	朝日新聞社 ㊨1260円	三谷幸喜	引っ込み思案な割には目立ちたがりやという2面性を持つ著者。ありふれた生活の中にもどこかおかしな行動を取っている。奥さんが小林聡美というのも異色な取り合わせ。	
2	十時半睡事件帖 刀	講談社文庫 ㊨400円	白石一郎	十時半睡は元、藩の大目付であったが隠居して半睡を名乗る。由来は半分寝て暮らすという意味だ。とはいえ城内、藩内で起きる不始末、厄介事を解決するために隠居の身なれど老練な半睡に難題が持ちこまれる。只、武家社会に疑問を持ちながら、存続を考え時にうやむやな解決にしてしまうあたりが通快感に乏しい。現代を江戸に置き換えたサラリーマン物といえるかもしれない。	
3	十時半睡事件帖 出世長屋	講談社文庫 ㊨490円	白石一郎	シリーズ第5集。連作もので上記は第3集。平穏な日々が続く武士の時代となると目付役の集団まで風紀が乱れてくる。かって福岡藩の目付け改革をし今は隠居中の半睡に江戸勤番の目付け改革の使命が下される。	
4	おろく医者覚え帖 室の梅	講談社文庫 ㊨540円	宇江佐真理	おろく医者とは死体の検分を行なう医者の事という設定だが本来は江戸時代には無い職業。捕物帖では役人や十手ものが死体を検分し経験により判断している。この物語では専門の鑑識医を専門にしているところがユニーク。時に解剖まで行なうが許可がうるさい時代だったので杉田玄白などを持ち出してつじつまを合わせている。	
5	悪意	講談社文庫 ㊨660円	東野圭吾	作家日高邦彦が自宅で殺された。発見者は妻と作家の友人野々口修。野々口も作家のためこの事件が解決するまで随時、手記に書きとめていくことを思いつく。事件を担当した刑事加賀恭一郎はこの手記を元に捜査を始め、手記の内容から犯人のトリックを見破り、真犯人をつきとめるが動機がどうしてもわからない。その動機はそれこそが題名につながる「悪意」であった。推理小説の手法としては古典的であるが手をかけてミスリードさせ、だんだんと核心に触れさせていくところは力量のある作家だと思う。	

6	浪花少年探偵団	講談社文庫 図560円	東野圭吾	中学・高校の時に「○○時代」、「○○コース」(○○は学年)という学習誌があったがその付録についてくるような学園探偵小説。といっても主人公は26歳の小学校の女性教師。元ソフトボール部のエースで4番だった彼女は大柄の美人。口も達者だがそれ以上に手が早い。彼女を慕う悪童を巻きこみ学校や身辺でおきた事件に首を突込み解決していく。事件がらみで知り合った見合い相手と新人刑事との恋の鞘当てもある5篇からなる連作もの。最終話では二人のプロポーズを蹴って留学してしまう。	
7	浪花少年探偵団・独立篇	講談社文庫 図570円	東野圭吾	前作の留学を終え再び教師へ復活する竹内しのぶ。かっての悪童も今は中学生になっているが何か問題があると彼女の家を訪ねてくる。	
8	山の眼玉	平凡社 図1050円	畦地梅太郎	1902年愛媛生まれの版画家。1999年没。 山と山の生活を主体にした素朴な版画で知られる作者が高齢の身で登った山々の感想をイラスト入りで綴ったエッセイ。登山を楽しむ者とは違った感想になっている	
9	雑学「大江戸庶民事情」	講談社文庫 600円	石川英輔	江戸研究の第一人者、小説も手がけている。 学者あがりだけに研究書的な作りになっているため通して読むのはきつい。興味のあるところ、知りたかったところをその都度拾い読みをしている。	
10	東京古書店グラフィティ	東京書籍 1529円	池谷伊佐夫	神田、本郷、早稲田の古書街を中心に中央線沿線、東京近郊の古書店をイラスト入りで紹介。 イラストは店の中を俯瞰した形で描き、本のジャンルの配置がわかるようになっている。イラストが必要かどうかは疑問だが紙面が楽しくなっているのは確か。本屋や本に関するエッセイも合間合間に書かれていて話題が面白く共感できるものが多い。	
11	のりたまと煙突	文藝春秋 1850円	星野博美	「のりたま」は丸美屋のふりかけ、「煙突」は風呂屋の煙突を連想させる。どちらも昭和を連想させる。案の定、帯には「遠ざかる昭和ー、私達は何を得て何を失ったのか？」とある。著者は写真家であり独自の感性で見た事，聞いたこと、記憶に残る事柄を育った時代から現代にいたるまで、キーワード毎にエッセイにしている。人間関係の移り変わりや責任感、便利さの裏にあるものなど共感できる部分が多い。題名になった「のりたま」と「煙突」の項もある。著者は猫好きでもあり巻頭に猫の家系図があるようにエッセイの中にしばしば飼い猫が登場する。「のりたま」は実は著者が飼っている猫の名前で白地に黄色の模様があるのが「たま」、さらに黒をプラスしたのが「のり」で「のりたま」に由来しているものだった。	

12	ミネラルウォーター 完全ガイド	だいわ文庫 680円	松下和弘	「からだにいい水」、「おいしい水」とは何かを定義し、数値で示せるよう基準値を明らかにしたもの。これによって市販の「水」80種について5段階評価。残念なのはコンビニ等でよく売られているものがあまり取り上げられていないところが完全とはいえない。この本の良いところは「正しい水の取り方」、「水の使い方」「浄水器の選び方」「ミネラルウォーターの作り方」などデータを元に「水」が身体にもたらす働きについても詳しく解説しているところ。	
13	だましゑ歌麿	文春文庫 800円	高橋克彦	江戸を高波が襲った夜、人気絵師喜多川歌麿の女房が惨殺された。時は寛政、田沼意次失脚の後、松平定信が発した徹底的な倹約令。歌麿の絵に込められた諷刺を憎む幕閣から妨害されながらも事件の真相を追う仙波一之進。改革を揶揄する謎の押し込みも現れ事件は益々複雑に。登場人物にはその時代に生きた蔦屋重三郎、春郎（北斎）、山東京伝、長谷川平蔵などを巧みに配し改革の「倹約令」の是非を検証しつつ事件の収束を図るあたりは浮世絵を研究し江戸に詳しい作者ならではのもの。仙波を慕う紅一点に深川芸者のおこうを登場させているがこの作品ではまだ推理の達人の片鱗は見せていない。	
14	おこう紅絵暦	文春文庫 540円	高橋克彦	「オール読物」に発表した12作の連作短篇集。だましゑ歌麿に出てきたキャラクターを使っての連作。この月刊誌との契約のせいか1年12作物の連作が眼につく。 各作品とも事件の状況設定は面白いのだが頁数が少ないためか謎解きまでの間が早く今一つ作品にのめり込めないところが難点。	
15	ヒグラシ・ ワンダーワールド 日暮修一の世界	松戸市教育委員会 2500円		2006年4月29日～5月28日 松戸市文化ホール・アートスポットまつど 「ヒグラシ・ワンダーワールド日暮修一の世界」展のカタログ。 主催：松戸市／松戸市教育委員会 ビッグコミックの表紙絵で知られる日暮修一の個展を見にゆき購入。サイン入りでした。入場料が300円と安かったので小規模なものと思って出かけたが出展数が多く会場も上記の2つに分けて飾られていた。氏は松戸出身ということで市が大々的に協賛したためのようだ。当日は氏も会場に来ており一人で椅子に坐って休んでいた。曜日によっては別途料金がかかるが氏自ら案内する企画も行なっていた。	

16	浮世の剣 八百八町事件噺	コスミック文庫 620円	西脇英夫	旗本の次男、浮草世之介は腕には自信があるが武家に嫌気が差し噺家になりたいと前座で修行中。本人の意気込みとは裏腹に噺はまるで見込み無し。噺好きの同心日影新吾と知己を得て難事件の探索に手を貸すことになる。 事件は「首提灯」「黄金餅」「王子の狐」「品川心中」など落語の題材を見たてた四つの奇妙な事件。奇妙な点の推理から始まり、解決までのやりとり、掛け合いはまあまあ楽しめる。ところどころに落語の一言紹介も。	
17	お江戸でござる	新潮文庫 500円	杉浦日向子 監修	NHKで放送していた「お江戸でござる」は江戸の暮らしをテーマに、コント・歌謡ショー・解説の3部構成になっていた。 杉浦日向子はコントの内容を考証し正誤について意見を述べた後、コントの中の事物や行事を取り上げ、興味を引くよう浮世絵などを活用しながら解説をしていた。身分による居住まいや応対の違い、金銭感覚、実際にあったもの、無かったものなど江戸の市民であるかのごとくやさしく解説するところが固苦しくならず好感が持てた。	
18	あのころの未来 星新一の予言	新潮文庫 540円	最相葉月	星新一は生涯に1000を超えるショートショートを書き続けてきた。ネット社会、クローン技術、臓器移植、テクノロジーなどの未来とそれがもたらす諸問題をすでに予見するかのごとく作品に描いていた。人と科学の関係を問い続ける著者がこれらの星新一作品を通して人類の未来への想いをエッセイの形で伝えている。	
19	面白南極料理人	新潮文庫 540円	西村淳	今年、2006年は日本南極観測50周年ということで上野の国立科学博物館で南極展が開催されている。越冬隊の人員は、50から60人になるが観測に携わる観測部門と設営部門に分かれる。設営部門は機械・通信・医療・調理・航空・建築・庶務等のサポート部隊として活動するが各々業務毎に1名か2名程度。アムンゼンやスコットなど多くの探険家が命をかけて挑んだ南極も単に暮らすということでは何ら問題ない日常的になってきている。本書は料理人である著者が自分の目線で見聞したもの、隊員の暮らし振りや奇妙な行動を面白可笑しく書き綴っている。先日、タモリ倶楽部で取り上げていたが板橋には南極の研究センターがありインターネットを使って双方向に映像を24時間接続している。番組の映像時は建物を作っているシーンだったがそこら辺の工事現場と全く変わらなかった。	

20	クジラを捕って、考えた	徳間文庫 620円	川端裕人	昭和30年代に小学生だったものは給食で出されたクジラの立田揚げ、大和煮は記憶にあると思う。自分の家では鯨のフライを売っていたので他の家よりは口にする機会は多かった。 家ではきんぴらの中に小さく刻んだ鯨肉をいれることもあった。鯨は揚げ立てのフライに塩を振って食べるか、カツ丼風にして食べるのが美味しい。学校に行っていた頃は弁当のご飯が見えなくなるように鯨のカツ煮でおおってもらうのが好きだった。本書は商業捕鯨が全面禁止になり唯一行なわれている調査捕鯨船に乗り込んだ著者がその実態、乗組員たちの複雑な事情（鯨が好きで生態に触れるには調査捕鯨船しかないなど）、捕鯨問題について公正な眼で自分の思いを綴っている。しかしながら長年の禁止で当事者以外の関心が薄れていっているのも否めない。本書には鯨の種類、生息地や、調査の仕方も詳しく紹介されている。	
21	私説博物誌	毎日新聞社 1200円	筒井康隆	1976年発行なので30年前の本ということになる。発行当時に読んでいるが家の建替えの際に処分していた。早稲田の古書店で見つけ懐かしくなり購入したもの。内容は51回にわたり毎日新聞に掲載されたもので動物・植物の一つ一つについて博物学的解説と作者の見解、実体験を交えたエッセイとして仕上げている。独創的な視点の持ち主だけにそれぞれの動植物の特徴・性質を面白可笑しく紹介し、時に人間社会や小説に結び付けて独断的な見解を語るところが面白い。	
22	大江戸見聞録	小学館 1800円	江戸歴史検定協会・編	平成18年11月3日に第1回江戸文化歴史検定が青山学院大學で実施される。この本は初級編の公式テキストとして発刊されたもの。カラー図版を多用し文字も大きく読み易い構成になっているがテキストといった感じはしない。 江戸の地図と年表、14のコラムがテキストらしい出来。メインは江戸の町・暮らしについて特定の場所にスポットを当て語り調でガイド。他に江戸から離れた各地の施設についても役割と由来について解説している。	
23	黒澤明と『生きる』 ドキュメント 心に響く人間の尊厳	朝日ソノラマ 1785円	都築政昭	胃癌を宣告された平凡な男が、その後、どう生き死んでいったか。映画『生きる』の創作の秘密をドキュメンタリー化したもの。スチール写真をふんだんに使い、場面場面に黒澤のこだわり、狙いを明かにし、当時の俳優、制作スタッフへのインタビューを重ね、いかにして一本の黒澤映画ができ、感動を呼ぶのかを知る一冊といえる。	

24	東京バンドワゴン	集英社 1890円	小路幸也	明治から続く下町の古書店〈東京バンドワゴン〉ちょっとおかしな四世代ワケありの大家族、堀田家のラブ＆ホームドラマ。春夏秋冬の四つの章よりなる身近におきる問題・事件を解決する連作もの。昭和40年代のホームドラマを意識して書かれている。 ［春］朝現れて夕方消える百科事典。 ［夏］猫の首輪につけられた文庫本の数頁 ［秋］失踪したおばあちゃんが持って出た古本 ［冬］冬に結婚するべからずという堀田家の家訓	
25	ゴルゴ13 世界情勢裏ナビ	小学館 1450円	さいとうたかを	あの麻生外務大臣が広言してはばからない愛読書の一つに「ゴルゴ13」がある。1968年から連載されているギネス級の作品。長く続いている理由の一つに新聞・教科書ではとりあげない裏の世界情勢をリアルに描いているところにある。本書は作品のエピソードから13のキーワードを抜粋し世界のニュースの裏にあるツボをわかりやすく解説。 （監視社会・国際金融・資源戦争・食糧戦争・日米経済戦争・メディア支配・民俗紛争・パレスチナ問題・イラク情勢・激動の中国・軍事技術・キーパーソン・影の組織） ベルリンの壁崩壊、ソ連滅亡による冷戦の終焉などでゴルゴの舞台がなくなり連載があやぶまれる声もあったが逆に諸問題が一気に浮彫りにされ活躍の場がますます広がった感じだ。かっての犯罪者としての匂いも消え、紛争の世界情勢の中で狂言回しの役割を演じるようになっている。	
26	和ごころ暮らし	ちくま文庫 780円	平野恵理子	物事、便利になったが故に日常から季節感が無くなったり、野菜・魚など元の姿・形を知らない人も多くなってきた。それでも日々の暮らしの中に食器、道具、食べ物など季節感を演出するもの、気持ちを大事にしたいと書き溜めた生活歳時記。著者は元々イラストレーターなので楽しくなるイラストを添えたエッセイ仕立てになっている。	
27	カバー、おかけしますか？	出版ニュース社 2625円		「新刊書店から古書店、全国津々浦々を巡って集めた本屋さんのカバー100有余枚」と帯にある。全国から集めたのであればもっと数多く掲載して欲しい感じはするが一枚一枚は厳選されたものだけにデザインの優れたものが多い。作家と古書店は関係が深いだけに思わぬ著名作家がカバーを描いていることもあり収集意欲がわくこともある。だが保存するとなるとこれが以外にかさばるものなのだ。自分の場合、本の題名が見えないのでかけてもらわない。店員のカバーのかけ方が雑、時間がかかりすぎるというのも理由だ。昔は数秒でカバーをかけてしまう名人芸の人がいたものだが…。	